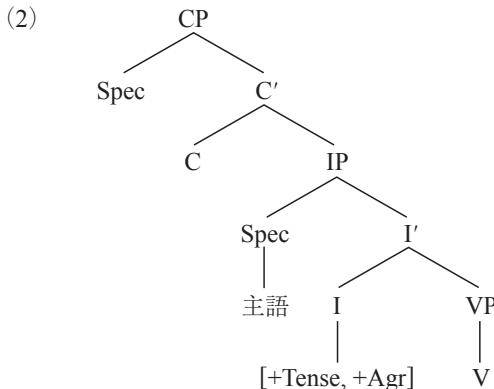


60 動詞移動

Chomsky (1965) 以降、動詞の屈折を法助動詞と同じ位置に基底生成させることになると、語尾を動詞に付着させる必要が生じた (*t*は移動後の痕跡)。

- (1) a. Mary can sing well.
b. Mary -s sing well. 接辞転移 → Mary *t* sings well.
Chomsky (1986) によって屈折Iも補文標識Cも最大投射を持つ節構造 (2) が提唱されると、VからIへの**動詞移動 (verb movement)**が議論になった。



他のヨーロッパ諸言語では、動詞がIへと移動している言語が多い。これはIとVの間に否定辞や副詞が介在していると顕著に認められる。イタリア語から例を挙げる (Belletti 1990, 1994; Zanuttini 1997; Murakami 2013)。

- (3) a. Mario am-a sempre *t* Rita. b. ?*Mario sempre ama Rita.
 Mario love-s sempre Rita Mario always loves Rita
 ‘Mario always loves Rita.’
(4) a. Mario non ama mai *t* Rita. b. ?*Mario non mai ama Rita.
 Mario not loves never Rita Mario not never loves Rita
 ‘Mario never loves Rita.’

本動詞が主語の前に出るならば、VからIを経てさらにCへ動詞移動したことになる。(5) はドイツ語の疑問文であるが、現代英語ではこの語順は許されず、英訳のように助動詞 do を用いなければならない (Murakami 2011)。

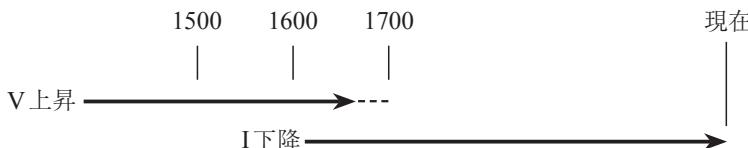
- (5) a. Sag-te Karl so? b. Warum sagte er so?
 say-Past Karl so why said he so
 ‘Did Karl say so?’ ‘Why did Karl say so?’

フランス語と英語の語順も、副詞や否定辞と動詞の位置関係に関して対照的である。フランス語はVが上昇し、英語ではIが下降するのである。

- (6) a. Jean aim-e pas/toujours t Marie. b. *Jean pas/toujours aime Marie.
 Jean love-s not/always Marie Jean not/always loves Marie
 'Jean never/always loves Marie.'
- (7) a. John t always loves Mary. b. *John loves always Mary.
- (8) a. John does not love Mary. b. *John loves not Mary.

Pollock (1989) は、英語は他のヨーロッパ諸語と異なり、動詞の語尾変化、中でも**一致 (agreement)** が乏しいため本動詞のVを上昇させる力がないと論じている。その議論上、定形動詞の [+Tense] [+Agr] という**屈折素性 (inflectional feature)** をそれぞれ最大投射としたIP分割の節構造は Chomsky (1995) にも採用され、1990年代の理論言語学に多大な影響を与えた。

歴史上、英語も一致が豊富で屈折が強かった時代は (7b), (8b) の語順のように**動詞上昇 (verb raising)** していた。Roberts (1993) に基づいて中野 (1994: 311) は英語のI下降は 1575 年頃に始まったとし、次のように図示する。



I下降が台頭するにつれて、助動詞 do が否定文・疑問文に規則的に用いられるようになった。そのような中、不規則動詞や仮定法・命令法の動詞は上昇し続け、助動詞 do と同時に使われることもあった (Murakami 1995)。

- (9) a. How didst thou escape? How camest thou hither?

(Shakespeare (1611) *The Tempest*, II.ii.123)

- b. Speak not, reply not, do not answer me;

(Shakespeare (1594) *Romeo and Juliet*, III.v.164)

V上昇とI下降の共存期間は長きにわたり、Haeberli and Ihsane (2016) によれば、本動詞のV上昇が完全に消滅するには16世紀から実に200年以上の歳月を要した。その間、上昇し続けた本動詞は原形（仮定法・命令法の原形か現在形）か過去形がほとんどであり、屈折語尾の豊かさがV上昇とかかわっていたのか否かは、未だに断定しがたい。屈折の水平化だけが、英語の動詞移動を衰退させた原因ではなかったのかもしれない。

(村上 まどか)